

教員養成課程における 防災教育フィールドワークの開発と評価 —学生評価、道德教育の多面的・多角的思考と 自らとの関わりの視点から—

柄 本 健太郎

概要

本稿では、教員養成課程において防災教育に関するフィールドワーク授業を開発し、授業評価と学生の変容に関する調査を行った。結果として、第一に、講義1日とフィールドワーク3日を組み合わせた授業の実践例が得られた。第二に、学生からの授業評価として旅程、金銭的・精神的・身体的な負担、課題量、授業経験の有意義さに関して肯定的な認識が得られた。第三に、授業を通じた学生の変容として、多面的・多角的な思考と自らとの関わりへの認識を強く持っていることが示された。第四に、気づき（多様さ、自他の限界、未整理な自身の内面、言葉で伝えることの重さと難しさ、メディアの意義と限界、知識の重要性、学校安全における地域の大切さ）と見方の転換（防災教育観の転換と広がり、被災地観の転換）が学生の内面に生じた可能性が示唆された。

1. 問題

東日本大震災発生から10年以上が経過する中で、教員養成において災害安全に関する教育、すなわち防災教育を充実させることは、災害への備えとして欠かせない。2022年（令和4年）3月には「第3次学校安全の推進に関する計画」が閣議決定され、計画策定に向けた課題の一つとして、「東日本大震災の記憶を風化させることなく今後発生が懸念される大規模災害に備えた実践的な防災教育を全国的に進めていく必要があること」が挙げられた。また、同計画の中では学校

安全を推進するための方策として「教員養成における学校安全の学習の充実」が求められている。

教員養成課程において防災教育を扱う取り組みとしては、多様なものが既に実施されている（例として、新福、2017・2021；鹿野・古賀・川島、2021；室谷、2014；伊藤、2019；吉田、2015；高橋、2015；香川・立松・石田、2019；鳴海、2020；山内・小口・早川・小倉・羽田・宋、2018；黒木、2017）。例えば、鹿野・古賀・川島（2021）は、動画視聴とゲーミングツールに着目し、実験によってそれぞれを実施した2群と統制群の間で、防災意識、防災への取り組み行動について比較を行った。室谷（2014）は、地域の防災訓練への参加と避難所設営訓練体験を通して教職課程学生の問題意識が高まったかを検討した。伊藤（2019）は、「教育制度論」の中で学校安全に関する授業を行い、コメントシートの分析を行った。

教員養成課程において多様な防災教育に関わる実践が行われている一方で、管見する限り、フィールドワークを伴う報告はそれほど見られない。新福（2021）と黒木（2017）では、講義とフィールドワークを組み合わせた授業を行い、その効果を検討しているが、フィールドワークは宿泊を伴わないものとなっている。

したがって、教職課程において複数日にまたがるフィールドワークを実施した場合に得られる学びについては未検討課題と考えられる。

2. 目的

以上を踏まえ、本研究では、大学の教員養成課程における防災教育を題材としたフィールドワーク授業の開発と評価を行うことを目的とする。宿泊を伴う、複数日にまたがったフィールドワークを含む授業を探索的に開発・評価し、事例を蓄積することで、今後のさらなる検討につながる材料を得ることとした。

3. 方法

3.1. 対象

3.1.1. 対象授業

教職課程の集中講義として2022年度秋学期に開講された「教育学特論 B[3][集中]」

を対象とした。授業期間は2022年9月5日から9月8日の4日間であった。講師は筆者を含め3名であり、専門はそれぞれ教育心理学、防災教育、教育社会学であった。

授業は「教科及び教職に関する科目」のうち、「大学が独自に設定する科目」に該当する。同一の科目名で複数開講されており、本稿記載の授業では防災教育をテーマとした。

授業の詳細なテーマと到達目標を表1に示す。

表1. 授業のテーマと到達目標

項目	詳細
テーマ	宮城県でのフィールドワークを通じて、自分の生き方、教師のあり方を創り出そう
到達目標	事前学修、現地フィールドワーク、事後学修を通じて、教師のあり方を深く考え、教師として必要な知識・技術・態度、発想を身につけ、今後の学修へのきっかけを得る。災害という予測が難しい状況での多様な課題への対応力を身につける。

3.1.2. 対象者

3.1.1 で述べた対象授業を受講した13名を対象とした（教職課程を履修している学生が13名中12名、非・履修生が1名）。学年は大学2年次から4年次までであった。

3.2. 評価方法

3.2.1. 授業評価アンケート

授業に対する学生からの評価と、道徳教育における「多面的・多角的な思考」と「自らの関わり」に関する学生の変容という二つの側面を測定するために、オンラインフォームを用いた調査を行った。回答期間は授業終了後からの2週間であった。

質問項目の一覧を表2に示す。

授業に対する学生評価は、授業の否定的な面を測定する6項目と、授業経験の有意義さを測定する1項目のそれぞれを独自に作成した。また、学生の変容に関する項目は、多面的な思考、多角的な思考、自らの関わりから考えることの3項目を中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編（文部科

学省、2017)の「第5章 道徳科の評価」における記述「…評価に当たっては、特に、学習活動において生徒が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが重要である。」(下線は著者)を参考に作成した。今回のフィールドワークによって学生の防災教育に関する内面的な変容が生じることが予想される。その際、防災教育に関する変容そのものだけでなく、変容に至るまでの思考のあり方、学生の防災教育に関連する事柄を自分事としてとらえる中で変容を深めているかといった学習過程にも、今回のフィールドワークが持つ多面性、主体性が影響を与えると予想される。

教示文には、調査目的の他、回答が任意であり回答の有無・内容が成績評価に影響しないこと、正しい回答、誤った回答というものではなく思った通りに回答してほしいこと、回答を途中でやめても構わないこと、匿名で回答でき、回答は個人が特定されない形で分析されること、分析結果は論文化されること、回答データの管理を厳重に行うこと、調査への回答をもって、調査協力への同意とみなすこと、連絡先を記載した。

量的項目の選択肢は、(1)「まったくそう思わない」から(5)「まったくそう思う」までの5件法であった。

表2. 質問項目一覧

項目	質問文
旅程の過密さ	A1. 集中授業の四日間のスケジュールは、過密だった。(例. 休憩がなさすぎた)
旅程の過疎さ	A2. 集中授業の四日間のスケジュールは、間が空きすぎていた(例. 特に何もしない時間が多かった)
金銭的負担の大きさ	A3. 授業による金銭的な自己負担が大きかった(例. お金がかかりすぎた)
精神的負担の大きさ	A4. 授業による精神的な負担が大きかった(例. 堪えられないほど心がつらかった)。
身体的負担の大きさ	A5. 授業による身体的な負担が大きかった(例. とても身体が疲れた)

課題量の過剰さ	A6. 授業課題の量は過剰だった（例、提出が難しいくらいの量だった）
授業経験の有意味さ	A7. 今回の集中授業の経験は、自分自身にとって意味のあるものだった
回答理由、要望等 （自由記述）	A8. 上記の回答理由、もしくは授業について何か意見・要望があれば教えてください。特になければ空欄で構いません。
多面的な思考	B1. 私は、今回の授業の経験によって、防災教育に関連することを複数の側面からとらえて考えるようになった。
多角的な思考	B2. 私は、今回の授業の経験によって、防災教育に関連することを複数の可能性から先のことをとらえて考えるようになった。
自らとの関わり	B3. 私は、今回の授業の経験によって、防災教育に関連することを自分自身との関わりからとらえて考えるようになった。
回答理由 （自由記述）	B4. 上記の3つの質問について、そのように回答した理由やきっかけについて、何かあれば教えてください。特になければ空欄で構いません。

※ A：授業評価に関する項目。B：学生の変容に関する項目。

※ A8とB4のみ自由記述を求める質的項目であり、それ以外は量的項目であった。

3.2.2. 学生レポート

授業を通した学生の変容を捉えるために、学生がフィールドワーク後に提出したレポートを分析した。分析では新福（2021）の防災教育における学校教師の専門性の分類を援用した。新福（2021）では、判決書教材と大川小学校被災校舎跡（2022年時点では石巻市震災遺構大川小学校）へのフィールドワークによる教員養成課程での授業を行い、防災教育に関する学校教師の専門性について6つの分類を得た。本稿では、新福（2021）の分類を参照しつつ、新福（2021）の分類に含まれない新たな学びが見られたかどうかを検討した。

3.3. 手続き

授業開発では、事前聴き取りと訪問調査を行った上で複数の教員や受講学生からの助言を得つつ検討を行った（詳細は柄本（2022））。

具体的には、2021年2月に約1時間、宮城県に所在する大学において防災教育に携わっている教員にウェブ上で聴き取りを行った。聴き取り内容はフィールドワークを想定した場合の震災遺構などの訪問地、日程の相談等であった。

その後、2021年3月17日、18日、19日の3日間にて、宮城県内の防災教育に関連した施設を教職課程専任教員3名が訪問し、調査を行った。

本稿では訪問調査以降の授業開発について述べる。

4. 結果と考察

4.1. 授業開発

4.1.1. ガイダンス、事前アンケート、事前講義

2021年2月の事前聴き取りと2021年3月の現地訪問調査を踏まえた上で、さらに2021年10月に学内のフィールドワーク経験が豊富な教員に1時間程度聴き取りを行った。主な聴き取り内容を付表1に示す。

その後、学生への周知・募集・説明、学内での各種申請・連絡・調整、学外への確認・予約・調整の作業を行った。2022年4月以降における授業開発に関連した作業一覧を付表2に示す。

2022年4月に教職課程の年度当初の全体ガイダンスが実施されるため、各学年にガイダンス内で説明を10分程度行った。説明の中で事前オンラインアンケートの回答URLを提示し、事前アンケートに回答した学生には、授業の履修希望者向けの事前ガイダンスを行った（参加は履修上必須とした）。学生へのガイダンス・事前アンケートでの説明事項を付表3に示す。

学生の募集を行った後に、2022年6月に最終確認として下見（実地踏査）を行った。下見での確認事項を付表4に示す。学生には下見の様子を資料で伝えると共に、フィールドワークの準備を各自で進められるよう参考文献のリストを紹介した。学生に情報共有した参考文献を付表5に示す。

教職課程を履修していない学生にも学校教育に関する基本事項を学んでもらうため2022年8月末に事前講義を行った。事前講義には全員を参加可能とし、学生同士の交流も併せて図った。事前講義の内容を付表3に示す。

しおりは4月に大枠を作成し、その後随時更新しながら、9月のフィールドワーク実施までに数回、学生と関係者に適宜配布を行った。しおりに記載した情報を付表6に示す。また、しおりの中で学生に示した持ち物一覧を付表7に示す。

4.1.2. 講義とフィールドワーク

最終的に決定された講義とフィールドワークの旅程を表3、一部の様子を図1～図4、フィールドワーク前後の授業課題を表4に示す。一日目には講義を大学内で行い、二日目以降は宮城県に移動し、フィールドワークを行った。



図1. 一日目の様子（防災教育に関する講義）



図2. 二日目の様子（震災遺構 仙台市立荒浜小学校）



図3. 三日目の様子（石巻市震災遺構 大川小学校）



図4. 四日目の様子（ミーティング）

表3. 講義とフィールドワークの旅程

9/5 (月) 大学内	9/6 (火) 仙台市、多賀城市
9:00-10:45 1限 導入、事前課題の共有	12:10-JR 仙台駅 3F 集合、体調確認
10:55-12:40 2限 防災教育（オンライン）	12:20 出発
12:40-13:25 お昼休み（45分間）	12:50-13:20 せんだい 3.11 メモリアル交流館
13:25-15:10 3限 防災教育（オンライン）	13:50-14:10 震災遺構 仙台市荒浜地区住宅基礎
15:20-17:05 4限 復興教育	14:20-15:20 震災遺構 仙台市立荒浜小学校
	16:00-17:30 宮城県多賀城高等学校
	18:30-20:00 チェックイン、夕食
	20:00- 仙台市内散歩

9/7 (水) 石巻市、女川町	9/8 (木) 仙台市
6:30- 朝食 (各自、7:30 までに終える) 8:00 集合、体調・検温結果確認 8:10 出発 休憩 (西行戻しの松公園、道の駅 上品の郷) 10:30-11:30 震災遺構 石巻市立大川小学校 12:00-13:00 昼食 (道の駅 硯上の里おがつ) 13:10-15:30 雄勝ローズファクトリーガーデン 16:00-18:00 女川いのちの石碑、旧女川交番、夕食 20:00- 仙台市内散策	6:30- 朝食 (各自) 8:50 集合、体調・検温結果確認 チェックアウト、出発 9:00-10:55 ミーティング 11:00 解散

表 4. フィールドワーク前後の授業課題

時期	項目
事前	<ul style="list-style-type: none"> ・事前レポートの作成 (書籍『16歳の語り部』を読み感じ、考えたことを記述する) ・映像の視聴 (復興教育に関する講演記録)
事後	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問記事の作成 ・まとめレポートの作成

※上記の他に報告冊子の著者校正作業がある

表 5. 2022年9月5日に実施した講義の主な内容

時間	項目
1 限	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介 (学生、教員相互) ・各種確認 (訪問場所、課題、現地連絡手段) ・役割の担当決め (リーダー、副リーダー、訪問先での学校紹介、訪問先交流会での御礼挨拶、ミーティング進行) ・現地移動用バスの座席決め
2 限 3 限	<ul style="list-style-type: none"> ・防災教育に関わって 20 年 教職員から聞き続けてきた「防災教育にとりくめない・とりくまない理由 ・連続する防災教育「狭義の防災教育」から「広義の防災教育」へ ・学習指導要領と防災教育 ・多くの事例から学ぼう
4 限	<ul style="list-style-type: none"> ・行政における防災教育の位置づけ ・復興教育と関連事項 (例. ケアとケアの連携) ・最大震度 7 を記録した地震の発生時刻、人的・物的被害の確認 ・現地ハザードマップの確認 ・授業に取り組む姿勢の検討 (災害ボランティアの姿勢を参考に)

四日間の流れ

一日目に大学にて実施した主な講義内容を表5に示す。フィールドワークは問題解決・仮説検証よりも当初の問いの精緻化や新たな問いの獲得といった問題発見・仮説生成に適しているという指摘（佐藤、2002）を踏まえ、一日目の段階でテーマと到達目標は学生が各自の中でも設定、検討を行うように指示した。

二日目は、まずせんだい3.11メモリアル交流館において地図と映像を確認することにより全体像をつかんだ。次に、震災遺構 仙台市荒浜地区住宅基礎と震災遺構 仙台市立荒浜小学校に移動し、後者は語り部の方と共に震災を受けた施設を訪問し、被災当時の様子を聴き取り、現在の状況を知った。その後、宮城県多賀城高等学校へ移動し、防災の意義やあり方について防災を専門とする災害科学科の高校生、教員と防災教育について議論を行った。

三日目は、松島市、東松島市を経由し、震災遺構 石巻市立大川小学校を訪問した。ご家族を津波により亡くされた元・中学校教員の語り部の方からお話をうかがい、学校のあり方、防災のあり方について聴き取りと質疑応答を行った。雄勝港に面した道の駅で昼食を取ったのち、元・小学校教員の方のお話をうかがうため、雄勝ローズファクトリーガーデンに向かった。防災教育のあり方、防災教育を行うために教師に必要な力について聴き取りと議論を行い、復興の一つの形としてガーデンでゼロから育てられたバラ、ハーブ、オリーブといった植物を見学した。その後、雄勝を離れ、女川町に移動し、女川いのちの石碑と震災遺構 旧・女川交番を見学した。

四日目は仙台市内で宿泊場所近くのレンタルスペースにてミーティングを行った。ミーティングでは全体の振り返りと報告冊子の記事の分担を相談して決めた。引率教員の都合により午前で現地解散となり、午後以降は自由時間であった。

全体の方針

事前の訪問調査（柄本、2022）に従い、場所の訪問にとどまらず、訪問先で多様な人と学生が交流できるように訪問場所を設定した。具体的には、高校生、現任教員、教員経験者といった学校関係者との交流の機会を設定した。都合が合わず大学生と同年代（10代後半～20代）の方との交流の機会は今回設けられなかった。

訪問場所の滞在時間は訪問調査を基に決定した。移動時間は、訪問調査に加え、Google Map で計算された移動時間を 1.2 ～ 1.5 倍することで余裕をもった時間となるように設定した。

なお、訪問先の方々と学生との間で議論・やりとりが活発に行われたことで訪問時間が 30 分程度延長した場所もあったため、実際の移動時間とは異なる箇所がある。時間変更等を反映させた実際の旅程を付表 8 に示す。

授業後に制作した報告冊子の内容を付表 9 に示す。

4.2. 評価

授業評価アンケートにおける量的項目の度数分布を図 5 から図 10 に示す。量的項目の回答数はすべて $n=9$ であった（回答率 69.2%）。

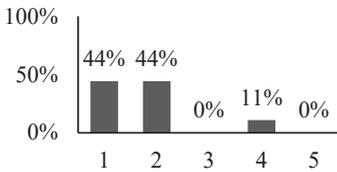


図 5. A1 旅程の過密さ

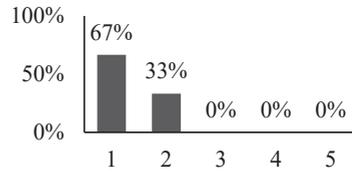


図 6. A2 旅程の過疎さ

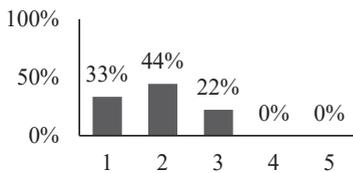


図 7. A3 金銭的負担の大きさ

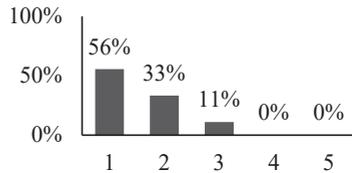


図 8. A4 精神的負担の大きさ

※ $n=9$

※ 1. まったくそう思わない、2. そう思わない、3. どちらでもない、4. そう思う、5. まったくそう思う

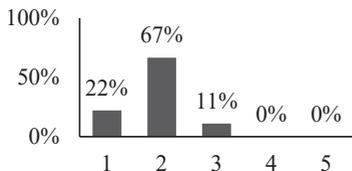


図 9. A5 身体的負担の大きさ

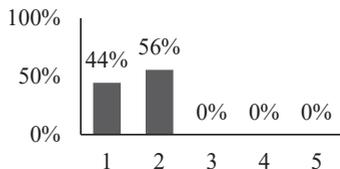


図 10. A6 課題量の過剰さ

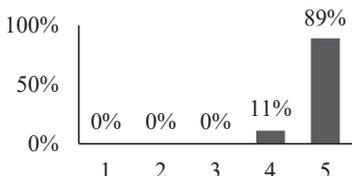


図 11. A7 授業経験の有意味さ

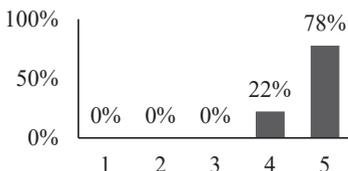


図 12. B1 多面的な思考

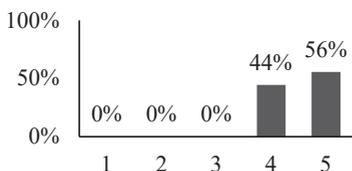


図 13. B2 多角的な思考



図 14. B3 自らとの関わり

※ n=9

※ 1. まったくそう思わない、2. そう思わない、3. どちらでもない、4. そう思う、5. まったくそう思う

4.2.1. 学生による授業評価

「旅程の過密さ」などの6つの否定的な質問項目すべてにおいて、「5. まったくそう思う」の選択は見られず、「A1. 旅程の過密さ」を除き、「4. そう思う」の選択は見られなかった。また、「2. そう思わない」と「1. まったくそう思わない」を合わせると約 77.7%～100%の選択率であった。

これらの結果から、今回の授業では「旅程の過密さ」、「旅程の過疎さ」、「金銭的負担の大きさ」、「精神的負担の大きさ」、「身体的負担の大きさ」、「課題量の多

さ」において学生は否定的な認識を持っておらず、大きな問題はなかったと考えられる。

また、「A1. 旅程の過密さ」において「4. そう思う」を選択した回答者の自由記述では、【スケジュールが過密だからとても疲れた、のではなくもう少しゆっくりみたかった、沢山の場所に行ってみたかったと感じた。もっと回ってみたかった。】と述べられていた（【 】内は自由記述回答を示す。以下同様）。

この点について、改善策としては例えば、「訪問先を減らす」、「一か所に留まる時間を増やす」、「フィールドワークの日程を増やす」、「訪問場所を増やす」という改善策が考えられる。このうち、「フィールドワークの日程を増やす」については、集中授業期間が4日間であるため、1日目の講義をさらに事前に実施しフィールドワークを集中授業期間初日から始めることや、フィールドワークの最終日を午前で終わりにするのではなく午後まで行うことが考えられる。

「授業経験の有意味さ」において、「4. そう思う」もしくは「5. まったくそう思う」のみが選択された。このことから、受講生は授業経験を自身にとって意味あるものと認識したと考えられる。関連する自由記述としては、【今回の集中授業は来年度以降の教職課程履修者、あるいはそうでない学生にも強く勧めることができる内容でした。特にこれから震災の記憶が薄れていく世代が増えてくるので、そんな人も一度は訪れて、震災や防災について考えることができる場としてこの授業はこれからも長く続けていってほしいと思います。とてもいい機会になりました。ありがとうございます。】や、【今回の受講生の雰囲気がとても良かった。グループワーク時も雑談時も学年問わず交わる場であったことが、精神的に支えになった。】といった記述が見られた。

その他の自由記述回答では、授業に対する要望として、【食事とは別の時間で、その日に感じたことを共有できる時間があると良い】、【事前学習の中で防災教育のイメージを書いていたら気持ちの変化や、参加する意義が明確化しそう】、【『16歳の語り部』を読んだこともあり、同じ世代の被災経験を直接伺う機会があれば良いと思った】、【あるシチュエーションに対する応用をみんなで考えてみるのも頭の整理かつ気づきが得られそうだった】等の意見が得られた。これらほど

れも実現が比較的容易であると共に、思考の整理や新たな気づきにつながる授業改善の手立てと考えられる。同時に、共有や振り返り、内面の変化の自覚をさらに行いたいという需要が学生の中でみられたといえる。

4.2.2. 多面的・多角的思考と自らの関わり

「多面的な思考」、「多角的な思考」、「自らの関わり」の3項目すべてにおいて、「4. そう思う」、「5. まったくそう思う」のみが選択された。このことから、3点について受講生は強く実感することができたと考えられる。

また、自由記述では【学校教育を通じて、取り組む当時の先生（保護者）、今防災を学んでいる先生・生徒と交流し、地域や土地について学ぶ視点も得ることができた。】という回答が得られた。このことから、元教員、保護者、生徒、現職教員といった多様な人々と接することで多角的な視点を学生が得ることができたと考えられる。

また、同じく自由記述において、【お会いした方々が皆さん未来を見据えていらしたので、ただ心を揺さぶられるだけではなく、自分が教師だったらどのような防災教育をするか？などを常に考えながら過ごした四日間でした。】という記述が得られた。このことから、交流先で関わった方から、自らはどうすべきかという問いを学生が自然と考えていたことが示唆された。

4.2.3. 学生レポートの記述分析

参加者全員分のレポートを分析に用いた ($n=13$)。分析においては、新福(2021)が指摘した学校教師の専門性に関連した学びについて、関連した学生レポートの記述を抽出した。結果を表6に示す。

また、新福(2021)の専門性の分類と比較し、新たに見られた学びと考えられる項目を学生レポートの記述から抽出した。その結果、気づきに関する7項目と、考え方の転換に関する2項目が得られた。結果を表7に示す。

表 6. 新福（2021）が指摘した学校教師の専門性に関連した学生レポートの記述

専門性の分類	今回の授業で見られた記述の例
1. 訪問による事実の学びと津波被害の恐怖。日常の当たり前風景への思い	「…語り部の方々は必ず、『東日本大震災よりも前のこの町、この学校、この地域を見てほしい。命があった。』と口にしていました。その言葉を聞いて私が東日本大震災当日、その後の仙台しか見ていないことに気付きました。」
2. いのちの尊厳の学び	「(自身の)教育実習中の生徒達、学校の様子が鮮明に思い出され、あの学校の賑わいが一瞬にして無くなったらと考えると耐えられなかった。佐藤先生の『救ってほしかった命は、救いたかった命で、救えた命だった』『最後に先生は子ども達を抱きしめたと思います。』という言葉が忘れられない。教師として児童生徒を守りたくない人はいない。」
3. 東日本大震災と自分自身の体験	「当時私は小学校4年生で、事の悲惨さをよく感じ取れず、そのまま現在まで生きてきた。」
4. 学校教師の責任への考察	「3・11以前の山に登るという行動を避難方法として考えておくべきだったのではないか。」
5. 学校教師の具体的な安全確保義務の内容	「いざ放送での指示が不能になった際に、どのように対応していくかを考えなければならぬと感じた。伝達が遅れ、わずかな判断ミスで子どもや教員の命に大きく関わる可能性が高い。しっかりとどのように災害時に情報手段を確保できるかも考慮していくことが大事であるように感じた。」
6. 未来を拓くために教師として伝え語り継ぐ決意	「ここからが私たちの考える防災教育のスタートラインだと思う。これからは震災を知らない世代の子たちに、どのように伝え、何を考えていくのかを教職員として、1人の人間として考えていきたい。」

表 7. 学生の学び（新福（2021）の分類と比較して新たに見られたもの）

学び	今回の授業で見られた記述
1. 多様さへの気づき	「…交流館の中で展示されていた、沢山の人の手書きの手紙を読んだ。…自分のことではなくて相手のことをじっくり考えて書いたのだろうなという手紙ばかりで、かける言葉に正解などないのだと気付いた。」 「また多賀城高校では教員の皆様、生徒の皆様と接することで年齢の違いで震災に対する考え方・感じ方に違いがあるのだとグループワークを通して学ぶことができた。」

<p>2. 自他の限界への気づき</p>	<p>「今回約3日間で学んだことが全てではありません。また、地域によって起こりうる災害は異なってきます。今はまだ誰かに何が危ないと伝えられるほどの知識はありません。教師になるまでには、あらゆる災害についての知識を身につけ、防災を伝えていけるようにしたいと思います。」 「佐藤敏郎先生をはじめとした、語り部になろうと決意して、われわれの前で震災を語ってくれた人々は、死んでいった人々もまだ生きている人々も含めて、自分たちの限界を、知識という意味でも、能力という意味でも、それをひきうけて、語りをつむいでいた。」</p>
<p>3. 自身の未整理な内面への気づき</p>	<p>「…ふとした瞬間に集中講義で訪れた場所のことを思い出し、東京での日々のなかでどこかやもやとした違和を抱えたままの二週間だった。…どんな光景や思いを前にして立ち往生しているのか、どんな言葉が適切なのか、それは私自身でゆっくりと考えていくしかない。」</p>
<p>4. 言葉で伝えることの重さと難しさへの気づき</p>	<p>「彼らがどんな思いで『防災』の二文字にたどり着いたのかということを考えるだけで、私は渡されたバトンの重さに耐えきれなくなってしまい、文章で、言葉でまとめるということをとて難しいと感じてしまう。」</p>
<p>5. メディアの意義と限界への気づき</p>	<p>「写真や動画がかつての街並みや風景を知るために記録の役割を担う様子を見て、映像メディアの意義を実感した。一方、語り部の方々にお話しいただいたことで初めて知り得た情報があった。復興に向けて動き出した街では、どうしても隠れてしまう事実が存在する。確かにそこにあった光景を語り継ぐことは、人の力でしかできない。」</p>
<p>6. 知識の重要性への気づき</p>	<p>「まずは自然のメカニズムや災害に関する情報を知ることが防災の始まりだと学んだ。…教師として、命を守るためにはまず知識をつけることが必要不可欠である。」</p>
<p>7. 学校安全における地域の大切さへの気づき</p>	<p>「学校の先生が正しい判断をできない時、地域の人と一緒に判断をすることが必要である。間違っていたら正そうと動くこと、これは防災だけでなく教育と社会を取り巻く環境すべてに当てはまることである。」</p>
<p>8. 防災教育観の転換と広がり</p>	<p>「災害教育とはつらく、目にしがたいものではなくて、未来のために学ぶ学問だと思った。」 「防災教育について学ぶ中で、コロナ禍や不登校問題、現代特有の個人化の進行にも目が向いた。」</p>
<p>9. 被災地観の転換</p>	<p>「今回、様々な場所でお話を聞き、感じた事がある。それは“被災地”ではなく“町”や“小学校”であるということだ。『被災した〇〇地域』『被災した〇〇学校』と世間に知れ渡り、県外の人からするとその地域は震災の後の町や小学校としてのみ認識されることがあると思う。私も無意識のうちにどこか似たような考えを抱いていたと思う。しかし、そこには私たちと変わらない生活があり命があったことを現地の方の話から強く感じた。」</p>

気づきについては、関わり方や考え方の多様性に関する「多様さへの気づき」、現状の自分の知識の限界や、他者が自らの限界を引き受けながら話をしてくれたことに関する「自他の限界への気づき」、経験によって感じたり得たことがうまく自身の中で整理され言語化されないことへの違和感に関する「未整理な自身の内面への気づき」、言葉で表現し伝えることの重みと難しさに関する「言葉で伝えることの重さと難しさへの気づき」、メディアの持つ意義とそこには入りきらない事実が存在することに関する「メディアの意義と限界への気づき」、災害に関する情報を知ることが防災の始まりであり命を守ることにつながることに関する「知識の重要性への気づき」、学校と地域の連携・協力が学校教育にとって欠かせないことに関する「学校安全における地域の大切さへの気づき」であった。

考え方の転換については、防災教育が目指す方向性がポジティブなものであることや広がりを持っていることに関する「防災教育観の転換と広がり」と、自身の住む場所と変わらない日常を持った場所として捉え直す「被災地観の転換」であった。

本稿で開発した授業はフィールドワークとして2泊3日の期間、現地に宿泊し、訪問・交流を行い、現地の天候・気温・風を感じ、現地のを食すというものであった。そのため、学生が得る情報は空間的・視覚的・聴覚的・嗅覚的・触覚的・味覚的等に教室での座学とは異なったものであった。また、実際に現地の方々と交流することで、人々の持つ思い、意思、熱量、葛藤、迷いを感じ取ることができたと考えられる。これらは、メディアを通して授業前までに学生が知っていた知識とは異なるものであった。

さらに、情報の質的な多様さや量的な多さから、言語化されない部分も含めた人々の思い等を感じ取った上で、課題として言語化を試みることは、現状の自分の知識の限界や、自身の内面に未整理な部分があること、言葉で伝えることの重さと難しさを実感することにつながると考えられる。同時に、授業初日の講義や、フィールドワークでの経験から、防災教育と被災地に関する見方の転換を経験できるのであろう。

また、(1)「多様さへの気づき」、「防災教育観の転換と広がり」、「被災地観の

「転換」が学びとして得られたこと、(2) 学生評価アンケートで「多角的・多面的な思考」と「自らとの関わり」に関する3項目で肯定的な結果が得られたことの2点から、本授業を通じて、学生は防災教育に関連することについて多面的・多角的に思考したり、「被災地観の転換」にみられるように自分事として、場所・人を捉えていたと考えられる。

なお、本稿で対象とした学生レポートの数は少ないため、抽出された以外の学びが講義とフィールドワークから得られる可能性がある。例えば、抽出対象とは別の課題の中では、海岸での強風と飛んでくる砂の体験からの気づきとして、自然の大きさと人間の小ささについて記述がみられた。また、レポートの記述を抽出する形で分析を行ったため、受講生全員がすべての項目について一様に学びを得ているという証拠は得られていない。そのため、得られる学びと学生個々の内面の把握について、さらなる検討が必要と考えられる。

5. 総合考察

本研究では、大学の教員養成課程における防災教育フィールドワークの開発と評価を探索的に行った。

結果として、講義1日とフィールドワーク3日間にて構成される授業が開発された。また、授業評価アンケートによる分析と、学生レポートの分析によって、授業の否定的な面はそれほどないこと、防災教育に関連することについて学生が多面的・多角的な思考を行い、自らとの関わりから自分事として考えていたこと、多くの気づきと防災教育観・被災地観の転換が学生の中で生じた可能性があることを指摘した。新福(2021)で得られた要素からさらに幅広い学生の学びが抽出されたことは、防災教育に関する講義と宿泊を伴うフィールドワークを組み合わせることの効果の一端を示していると考えられる。

また、本稿によって授業開発により宿泊を伴うフィールドワークの事例の蓄積することができた。教員養成課程においてフィールドワークを通じて防災教育に関する学修を行う際、比較・検討の材料として本稿の意義があると考えられる。

一方で、単年度における一事例であるため、別年度・複数年度での継続的实施、

別の形式のフィールドワーク（例、日程を増やす）を実施し、知見を比較・更新していくことが望ましい。

また、本研究で扱ったアンケートのサンプルサイズは小さく、学生レポートの数も限られているため、講義とフィールドワークを通じた学生の防災教育に関する学びについて、今後も継続的な調査・検討が求められる。

6. 引用文献

伊藤 健治（2019）教職課程における「学校安全への対応」に関する授業報告 東海学園大学教育研究紀要 5, 24-30.

香川 栞理・立松 麻衣子・石田 正樹（2019）教員養成大学における防災教育の効果的な学習方法—防災教育に関するアンケート調査と「学生防災会議」の企画・運営からの一考察— 奈良教育大学自然環境教育センター紀要, 20, 11-23.

黒木 貴一（2017）学校を利用した災害避難を想定した地図学習 2017年度日本地理学会秋季学術大会

文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編

文部科学省（2022）第3次学校安全の推進に関する計画について

文部科学省（n.d.）教職員のための学校安全 e-ラーニング

室谷 心（2014）地区防災訓練を利用した、教職課程学生に対する防災教育の試み 地域総合研究 15（1）, 111-120.

鳴海 昌江（2020）教職課程における「学校安全」—教育行政論における危機管理についての講義より— 北星学園大学文学部北星論集 57（2）, 85-91.

佐藤 郁哉（2002）フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる 新曜社

鹿野 翔太・古賀 佳樹・川島 大輔（2021）大学生を対象とした防災教育の効果検証 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 20（1）, 63-69.

新福 悦郎（2017）教員養成における防災教育の学習内容・方法についての研究—判決書教材を活用した授業についての感想文分析から— 石巻専修大学 研究

教員養成課程における防災教育フィールドワークの開発と評価—学生評価、道徳教育の多面的・多角的思考と自らの関わり視点から— 柄本 健太郎

紀要 28, 63-70.

新福 悦郎 (2021) 大川小学校津波被害訴訟高裁判決を活用した防災教育—判決書教材とフィールドワークで学ぶ教員養成の授業—安全教育学研究 (特集号), 61-71.

高橋 利弘 (2015) 「環境・防災教育」における担当授業の省察—「学校安全」に関する2時間の授業を通して—東宮城教育大学教育復興支援センター紀要 3, 35-43.

東京都総務局総合防災部防災管理課 (2015) 東京防災

東京都総務局総合防災部防災管理課 (2018) 東京くらし防災

柄本 健太郎 (2022) 防災教育フィールドワーク—宮城県 (体験学習のデザイン) (金井 香里・和井田 清司・柄本 健太郎 編著『変動社会の教職課程』三恵社), 231-249.

山内 啓之・小口 高・早川 裕式・小倉 拓郎・羽田 康孝・宋 佳麗 (2018) 地理歴史科教員や教員養成課程の学生のための GIS 実習用教材の開発 2018 年度日本地理学会秋季学術大会

吉田 利弘 (2015) 「環境・防災教育」における担当授業の省察—「学校安全」に関する2時間の授業を通して—東宮城教育大学教育復興支援センター紀要 3, 35-43.

謝辞

本稿記載の授業を開発するにあたり、様々な方にご協力いただきました。丸橋珠樹先生、諏訪清二先生、増田亜美さんには詳細にわたり数多くの貴重なご意見をいただきました。みなさまに厚く感謝申し上げます。

付表

付表1. フィールドワーク経験の豊富な教員への主な聴き取り内容

分類	項目
授業運営	<ul style="list-style-type: none"> ・教育効果を考慮した適切な受講人数 ・履修者の選抜における明確な基準の設定 ・資金の確保 ・学生の負担への配慮と授業の魅力化 ・フィールドワーク前後の活動の設定（例：過去の受講生との交流、授業を履修しなかった学生との交流、情報発信、文化祭での出店）
地域への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・報告書作成の意義と実際 ・授業を通じた社会や大学への還元の意味と方法
その他留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・継続して開講することの重要性 ・学生同士のつながりの大切さ ・現地の人とのつながりの大切さ ・地域の仕組みを知ることの大切さ ・学生の現地での体調管理の大切さ

付表2. 授業開発に関連した作業

時期	実施項目
実施前 (2022年4月～ 2022年9月4日)	<ul style="list-style-type: none"> ・関係者との調整 ・学生対応 <ul style="list-style-type: none"> * 4月 学生へのチラシ配布 * 4月 教職課程ガイダンスでの説明（1～4年） * 4月 事前ガイダンスの実施 * 4月 抽選 / 追加募集（教務課への履修者リスト送付） * 6月 大学への学生保険の適用申請 * 6月 事前課題の連絡、しおりの配布 ・関係者への依頼・予約・調整 <ul style="list-style-type: none"> * 5月 宿泊場所 * 5月 交通手段（現地移動の貸し切りバス） * 5月 貸し会議スペース * 5月 学内援助金の申請 * 8月 次年度予算案の検討 ・最終確認 <ul style="list-style-type: none"> * 6月 下見・実地踏査 * 8月 1週間前からの体調確認 * 8月 事前学修（事前講義等） * 8月 オンライン機材のテスト * 9月 訪問先土産の購入

実施後 (2022年9月9日～ 2023年1月)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 検温の継続実施、健康状態の経過観察 ・ 教職課程履修生への報告 ・ 課題、評価 <ul style="list-style-type: none"> * 9月 訪問記事・まとめレポートの集約 * 9月 授業評価アンケート * 10-11月 冊子の作成 * 12月 配布、関係者への御礼 * 12月 教職課程活動ブログに記事掲載 * 12月 成績評価（非・履修生を含む） ・ 次年度の準備 <ul style="list-style-type: none"> * 10月 到達目標、内容、評価の検討 * 10月 講師依頼 * 10-12月 非常勤講師手続き * 11-12月 予算申請、承認 * 12月 シラバス入力 * 1月 履修者数の制限に関する教務課への連絡
--------------------------------	--

付表 3. ガイダンス、事前アンケート、事前講義での説明・確認事項

分類	説明・確認事項
教職課程ガイダンス (各学年で行われる年度 当初ガイダンスの中で 時間を設けて説明した)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の目的と意義 ・ キーワード ・ 日程 ・ 訪問候補地（訪問調査時の写真も提示） ・ 現地への貢献について（意見交換と冊子制作） ・ 履修者数 ・ 費用 ・ 担当教員 ・ 事前アンケートの回答 URL ・ 連絡先
事前アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職課程への登録の有無 ・ 参加できる事前講義の日程があるか ・ 食べ物のアレルギーの有無 ・ 緊急連絡先（学生の保護者等） ・ 自己紹介（好きな活動、食べ物、趣味等） ・ 参加したいと思った理由 ・ その他、要望、質問など
事前ガイダンス (授業の履修希望者向け に実施した)	<ul style="list-style-type: none"> ・ ガイダンス参加後の履修登録の流れ ・ 日程（再確認） ・ 新型コロナウイルス感染症対策の確認 ・ 費用（移動手段別の概算、宿泊費等） ・ 課題内容 ・ 履修者の抽選があった場合の選考基準

事前講義	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介（事前アンケートの情報を活用） ・しおりの配布、説明 ・講義（教員になるには、教職課程とは、学校教育とは、防災教育の位置づけ） ・活動（チームビルディング、課題書籍を読んだ感想の共有）
------	--

※移動手段別の費用概算を説明する際は学割についても伝えるとよい

付表4. 下見（実地踏査）の確認事項

項目	詳細
（事前準備）	・現地地図の確認（例．Google MyMap の作成）
服装	・学校を訪問する場合にスーツは必要かどうか
集合できる場所	・教員と学生が集合できる広さはあるか（例．駅、宿泊場所）
駐車スペース	・訪問先、宿泊場所に駐車スペースはあるか
宿泊場所	<ul style="list-style-type: none"> ・チェックイン、チェックアウト方法、支払い方法 ・領収書等を宿泊場所から発行してもらう方法 ・部屋、食堂、大浴場、非常用口の様子 ・感染対策
ミーティングスペース	・広さ、席数、感染対策（除菌、窓の数と位置、換気扇等）
食事場所	・感染対策、質、サービス、場所、混み具合
お手洗い	・学生が利用しやすいか（例．位置、数、設備の質）
移動ルート	・歩きやすさ（路面、信号）、所要時間、交通量、階段・エスカレーターの有無（上下動の有無）
費用	・実際にかかった費用はどれくらいか
その他の留意点	・記録、学生への報告のために写真を撮る

付表5. 学生に共有した参考文献

分類	詳細
担当講師の紹介	<ul style="list-style-type: none"> ・書籍「16歳の語り部」（ポプラ社） ・書籍「生かされて生きる」（河北選書） ・書籍「高校生、災害と向き合う」（岩波書店、ジュニア新書、Kindle版） ・書籍「防災教育の不思議な力」（岩波書店） ・書籍「図解でわかる14歳からの自然災害と防災」（太田出版）

<p>訪問先関係者の紹介</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・関係者の復興教育に関する講演映像（2021年10月講演の録画） ・映像「ほくたちわたしたちが考える復興～夢を乗せて～」(日本児童教育振興財団) ・映像「人とつながり希望を紡ぐ」(雄勝花物語 紹介動画) ・書籍「震災と向き合う子どもたち」(新日本出版社) ・書籍「16歳の語り部」(ポプラ社) ・論文「震災体験の対象化による被災児への《心のケア》の試み」 ・論文「低平地の利活用を進める官民連携事業—石巻市の雄勝花物語の挑戦—」 ・論文「『復興教育』の具現化を目指す雄勝花物語の挑戦」 ・冊子「小さな命の意味を考える」第1集、第2集
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スマートフォンアプリ「東京都防災」、「Y!防災速報」 ・ウェブサイト「防災模試」、「東京都防災模試2022」、「ヤフー防災模試」、「防災ダイバーシティ」、「教職員のための学校安全e-ラーニング」(文部科学省、n.d.) ・防災ブック「東京防災」(東京都総務局総合防災部防災管理課、2015)、「東京くらし防災」(東京都総務局総合防災部防災管理課、2018)

付表 6. しおりに記載した情報

<p>基本情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タイトル ・実施期間 ・大学連絡先 ・受講者、教員一覧（部屋割と役割の記入欄あり） ・旅程 ・バス車内図 ・地図（全体図。Google Map 利用） <p>学修について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークのテーマ（各自用。記入用空欄） ・フィールドワークのテーマ（受講生共通） ・到達目標（受講生共通） <p>注意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症関連の注意事項 ・熱中症対策 	<p>連絡先・住所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿泊場所 ・ミーティングスペース ・バス会社（現地移動） ・食事場所 ・引率教員 ・発熱した場合の相談センター <p>持ち物</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必須なもの ・学生が各自で考えるもの <p>緊急時の対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・台風などが発生した場合 ・新型コロナウイルス感染症への感染が疑われる症状が出た場合 ・宿泊場所最寄りの病院（住所、連絡先） ・学生保険（名称、大学の担当部署）
--	---

付表7. しおり内で示した持ち物一覧

<p>必須</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現金、携帯電話、健康保険証、学生証、記録用の紙もしくはノート、筆記用具、マスク（宿泊日数分）、体温計、ビニール袋（マスク処分量）、健康観察表 <p>学生が各自で考えるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身分証明書、着替えの服、下着、靴下、飲み物（熱中症対策）、ハンカチ、ティッシュ、常備薬、酔い止め、虫よけ、洗面用具、化粧品、タオル、生理用品、携帯電話の充電器、折りたたみ傘、日焼け止め、帽子、日傘（熱中症対策）

付表8. 実際の旅程

9/5 (月) 大学内	9/6 (火) 仙台市、多賀城市
9:00-10:45 1 限 導入、事前課題の共有 10:55-12:40 2 限 防災教育（オンライン） 12:40-13:25 お昼休み（45分間） 13:25-15:10 3 限 防災教育（オンライン） 15:20-17:05 4 限 復興教育	12:10- JR 仙台駅 3F 集合、体調確認 12:20 出発 12:50-13:20 3.11 せんだいメモリアル交流館 13:50-14:10 震災遺構 仙台市荒浜地区住宅基礎 14:20-15:20 震災遺構 仙台市立荒浜小学校 16:00-18:00 宮城県多賀城高等学校 19:00-21:00 チェックイン、夕食 21:00- 仙台市内散策
9/7 (水) 石巻市、女川町	9/8 (木) 仙台市
6:30- 朝食（各自、7:30までに終える） 8:00 集合、体調・検温結果確認 8:10 出発 休憩（西行戻しの松公園、道の駅 上品の郷） 10:30- <u>12:00</u> 震災遺構 石巻市立大川小学校 12:20-13:20 昼食（道の駅 硯上の里おがつ） 13:30-16:00 雄勝ローズファクトリーガーデン 16:20-17:30 女川いのちの石碑、旧女川交番 19:00-20:30 夕食（仙台市内） 20:30- 仙台市内散策	6:30- 朝食（各自） 8:50 集合、体調・検温結果確認 チェックアウト、出発 9:00-10:55 ミーティング 11:00 解散

※下線は計画時からの変更箇所

※9/7夕食は店舗が臨時休業であったため、当初予定の女川町ではなく仙台市内となった。

付表 9. 報告冊子の主な内容

- ・表紙
- ・受講生、訪問先協力者一覧
- ・目次
- ・授業の様子（写真）
- ・はじめに・授業概要
- ・フィールドワーク訪問記事
- ・レポート（まとめ、事前）
- ・資料（参考文献、講義資料）

